

【書評】

キム・チュイ 著  
『満ち足りた人生』  
関未玲訳、彩流社、2023 年

Kim Thúy,  
*Mãn*, Éditions Libre Expression, 2013

一條由紀  
ICHIJO Yuki

ベトナム系カナダ人の伝説作家キム・チュイが 2013 年に発表した『満ち足りた人生』は、単著としては彼女の 2 作目の小説である。デビュー作『小川』(2009 年)と 3 作目の小説『ヴィという少女』(2016 年)は既訳があったが、その間に位置する『満ち足りた人生』の邦訳が刊行されたことにより、日本でもチュイ作品の発展を順を追ってたどることが可能になった。チュイは初作でカナダ総督文学賞を受賞し、2018 年にはニュー・アカデミー文学賞(ノーベル文学賞の代替賞)の最終候補にノミネートされるなど、今や世界的に評価される作家である。チュイ研究者でもある関氏の細心の翻訳と解説により、チュイ作品やケベック社会に関して、日本での理解が一層深まることが期待される。

『小川』や『ヴィという少女』と同様に『満ち足りた人生』も、ケベックに移住したベトナム人女性が、自身や身近な者たちの人生を語る短い断章で構成されている。本作の主人公であり語り手であるマンは、ケベックで暮らすベトナム人男性に嫁ぐために祖国を離れ、夫が経営するベトナム料理店で働くようになるのだが、細やかな心配りの行き届いた彼女の料理は、国や文化を超えて人々を惹きつけ、彼女自身の人生を大きく動かすことになる。刊行したレシピ本の評判によって活躍の場をケベック外にまで広げることになる主人公の人物像には、移住後さまざまな職業に従事し、レストラン経営の経験もあり、レシピ本も出版している作者チュイ自身がある程度反映されているのだろう。チュイの小説はどれも五感に訴える描写に優れているが、『満ち足りた人生』では料理や食材の色、香り、味、食感が読者を楽しませてくれる。主人公の記憶や思考のゆらぎにつれて時空を超える語りもチュイ作品の特徴

であるが、今作でもマンの語りは過去と現在を往還し、ベトナム、ケベック、あるいはパリへと浮遊する。

このように、『満ち足りた人生』はチュイの他の小説と共通した主題や文体を有するのだが、『小川』や『ヴィという少女』の主人公たち、さらには作者自身とマンには大きな違いがある。すなわち、マンがベトナム人にとって重要な祖先や家系といったものからあらかじめ切り離された存在であるという点である。未婚で彼女を産んだ母に捨てられたため両親を知らないマンに愛情を注ぐのは、彼女がママと呼ぶ育ての母である。ママは裕福な家庭に生まれながら継母や異母弟妹に虐げられ、対仏独立戦争の混乱のさなかに出自を捨て、レジスタンスに加わったという人物である。ママはマンの将来を考えて彼女を嫁がせることを選択するのだが、夫となるのはポートピープルとしてケベックに亡命していた男性であり、彼もまた、「独りきりの、寄る辺なき人間」(p. 18)<sup>1</sup>である。生まれた時から根を奪われていたマンは、なんらかの理由で同じように根を失った者たちと家族になるのである。しかし、その縁が新しい道を切り開き、マンは弟や姉のような存在に出会い、ついには運命の人を見つけるに至るだろう。『満ち足りた人生』は、血縁によらない繋がり料理の力によって、マンが国や文化を越境し、開花していく物語である。特に3人の人物とマンの関係から、彼女の物語をたどってみたい。

最初にマンを越境に導くのはママである。ママは教師であり、マンにフランス語を教えることによってすでに外界への扉を開いていたのだが、さらにママは、自分の身に何が起こっても心配ないようにと、マンを保護者のような男性に託すことを考え、ケベックに降嫁させる。それは、マンが新天地で「もう一度自分を創造できる新たなチャンス」(p. 54)を掴むことを期待したからでもあるが、娘の可能性を広げると同時に狭めるようなやり方でもある。というのも、マンの意思とは関係なく見合いによって結婚話が進められるからである。実の母に望まれなかった子どもはベトナム語で「完全に満たされている」「他にもう何も望むことがない」「すべての願いがすでに聞き入れられた」(p. 36)という意味のマンという名を与えられたがために、「これ以上」を望むことは許されない。マンは異を唱えることなくママに従う。夫となるべき男性は彼女に気を配るような人ではなく、「自分の隣に私の場所をつくってあげようなどとは決して思わない」(p. 18)者との関係が一生続くのだと考えても、マンはただそれを受け入れる。また、マンは混乱したベトナムで「生き延びるためには不可欠」な処世術として、争いを避けて「目に見えない」

存在になることをママから教え込まれている (p. 105)。結婚後もマンは「目に見えない」忠実な妻として夫に仕えるだろう。気づかれないうちに、それとなく気配りをし続けるのである。夫のために懐かしい故郷のデザートを用意し、彼が病気の時には手の込んだ煮込みをつくるが、マンは夫が彼女の料理に心を動かすことを望んでいるわけではない。マンは出自が不明であるにもかかわらず選んでもらうという「幸運」を授かったのだから、彼女の方が「彼のことを気にかける必要があるのであって、その反対ではなかった」(p. 115)。妻は夫の幸福を夫婦の幸福とし、調和を保つことでよしとすべきである。『満ち足りた人生』は愛よりも幸運や調和を重視するこのような結婚について、肯定も否定もせず、ただマンの視点から淡々と語っている。

ともかく、こうしてケベックに渡ったマンは、従順に運命を受け入れ、夫のレストランで働くことになるのだが、故郷の料理が彼女の前に新たな道を切り開いてくれることになる。マンが再現する祖国の味は、ベトナム人の客たちの胃袋と心を満たすだけでなく、評判が高まるにつれてケベック人をもレストランに惹き寄せるようになる。人手が足りなくなり、雇うことになった若いベトナム人男性はマンにとって弟のような存在となり、客として訪れたケベック人ジュリーは姉のような存在となる。特にジュリーとの出会いは重要である。ジュリーは、『小川』のジャンヌや『ヴィ』のジャサントと同様に、主人公を導き、人生の新たな扉を開いてくれる人物だ。それは、シスターフッドを体現する存在であり、また、あたかもおとぎ話の「良い妖精」のような存在でもある。『小川』の主人公グエン・アン・ティンは同級生ジャンヌを「私たちの妖精」と呼んでいた。ジャンヌはまだフランス語がわからなかったグエンたちベトナム人の小学生に「音楽と身振り」で話しかけ、「体の奥底に眠っていた声」を取り戻させてくれた<sup>2</sup>。『ヴィ』のジャサントも『満ち足りた人生』のジュリーも、このジャンヌの系譜に連なるケベック人女性である。出自が不明であるマンは、家系が重要なベトナムではママの親族から色眼鏡で見られることを免れなかったというが、ジュリーはマンに「真<sup>ま</sup>っ新<sup>あらた</sup>なページ」(p. 55)を与えてくれる。ジュリーに導かれ、マンはレストラン事業を拡大する。隣家をアトリエとすべく、ある晩突然その鍵をマンに差し出したジュリーは、ヒロインに魔法の贈物をする「良い妖精」のようである。店のあちこちに記されるようになるマンの名は、彼女が「見えない存在」であることを暗示しているかのようだ。ジュリーはマンにフランス語を教えるだけでなく、「身振りや感情」も教えてくれる。ジュリーは「愛している」

という言葉で愛を明示し、熱い抱擁で感謝や喜びを表現する。ベトナム人とは異なる表現方法をマンに教えるジュリーは、マンがベトナム文化とは異なる文化に馴染むのを後押ししてくれる。まわりの皆に分け隔てなく幸福を与えるジュリーは、欠けているところのない人物であり、マンの名が意味するはずのものを本当に持っている人物として提示される。この幸運の妖精に導かれてマンが出版したレシピ本は、彼女にもうひとつの重要な出会いをもたらすことになる。

かつてフランス領インドシナで孤児院を経営していた両親のもとに生まれ、現在はパリでレストランのオーナーシェフとなっているリュックは、レシピ本がきっかけでマンと知り合い、ふたりはたちまち恋に落ちる。マンの料理は、ベトナムを離れざるを得なかったリュックの母の喪失感を癒し、リュックとベトナム文化を和解させる。そして、ともにシェフであるリュックとマンは料理によって愛を深める。ふたりがパリのレストランで披露する多彩なベトナム料理は恋の喜びに満ちている。初めて出会った日の握手で恋に落ちたマンは、リュックに触れられることで、リュックに見つめられることで、新たな自分を見出す。五感に訴えかけるチュイの文章は、恋の身体的側面を強調し、官能的である。見合いで結婚した夫との間に子どもを授かり、穏やかな幸福を享受していたとはいえ、それまで恋を知らなかったマンは、リュックによって自分の身体を再発見する。リュックとの恋は、「目に見えない」存在だった自分の身体を取り戻し、人生を生き直すことにほかならない。リュックに触れられてマンは自分の「顎の下にある肌の三角形の存在」(p. 100) に初めて気づき、リュックだけがマンの腿の火傷の跡に「世界地図」(p. 132) を発見する。家の鏡に映る自分の姿にいつも違和感があったマンは、リュックの目に映る自分こそが本当の自分だと理解する。マンはリュックによって、リュックへの愛によって開花するのである。だが、既婚者で子どももいるふたりの関係は長くは続かない。リュックを失ったマンは、戒めと慰めをママから与えられ、定められた運命に屈しない勇気をジュリーからもらい、少しずつ立ち直っていく。マンはリュックがいつもそうしてくれていた身振りや、いつもかけてくれていた言葉で、子どもたちに愛を示し始める。例えば「愛している」というメッセージを子どもたちのサンドイッチの包みに忍ばせるというやり方で。ジュリーがマンに「身振りと感情」を教えたように、リュックも愛を表現する方法をマンに教えたのである。それは、婉曲に、あるいは気づかれないようにそっと「目に見えない」やり方で愛をあら

わすベトナム人とは異なる愛情表現である。ジュリーが撒いた種がリュックによって芽吹くようにして、マンは文化を横断し、元来身につけていたのは別の身振りや感情表現を自分のものにしたのである。

このように『満ち足りた人生』は、根を持たない存在であったマンが、血縁によらない繋がりや料理の力によって、複数の国や文化を横断し、人々を繋ぎながら自らも開花するさまをたどっている。小説は主人公マンの物語を中心に展開するが、マンの周囲の人々の人生も鮮やかに切り取っている。ママとフンの秘めやかな愛の物語や、マンが弟のように思うベトナム人男性の恋物語など、多様な形の愛の変奏を味わうことができる。ベトナムではレシピとは母から娘へこっそりと受け継がれる秘密であるそうだが、マンの料理や、仲間たちとともに出版したレシピ本は、人々と文化の懸け橋となった。エピグラフに掲げられたエルンスト・ヤンドル<sup>3</sup>の詩は、愛しあう「僕」と「君」の身体が絡みあってひとつになるイメージによってリュックとマンの物語を暗示しているようでもあり、マンが体現するベトナム文化と西欧文化の混淆を表現しているようでもある。

(いちじょう ゆき 北海学園大学)

## 注

- 1 括弧内のページは『満ち足りた人生』（関未玲訳、彩流社、2023年）による。
- 2 キム・チュイ著、山出裕子訳『小川』彩流社、2012年、61頁。チュイは、ベトナムから難民としてケベックにたどり着いた時、「おとぎ話の世界にいるよう」に感じたという（「移民へのまなざし、寛容な温かい心で ベトナム難民としてカナダへ、作家のキム・チュイさん」『朝日新聞』2023年2月15日、夕刊3頁）。
- 3 エルンスト・ヤンドル（1925-2000）はオーストリアの詩人。『満ち足りた人生』には他にも複数の詩の引用が散りばめられている。